

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 13 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380188

研究課題名(和文) 東アジア冷戦体制の「溶解」と持続の狭間で：韓国の「脱冷戦」外交に焦点を当てて

研究課題名(英文) The "Dissolution" or Persistence of the Northeast Asian Cold War Regime: Focusing on the ROK's "Post Cold War" Diplomacy

研究代表者

木宮 正史 (KIMIYA, Tadashi)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：30221922

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：朝鮮半島冷戦体制に焦点を当てて、東アジア冷戦がグローバル冷戦とどのような関連を持って展開されたのかを日米韓の一次史料に基づき解明した結果、1980年代に本格化された韓国の北方外交が、70年代のデタント期、南北体制競争や外交競争の激化に対応した進取的な選択として、韓国朴正熙政権によって既に選択されていたという新たな知見を獲得した。

さらに、そうした知見に基づき、韓国外交に対して日本が積極的に協力しているという新たな事実を発掘することを通して、国交正常化50周年を迎えながらも葛藤が絶えなかった日韓関係に対して、この50年の成果を踏まえたくて新たな関係を構築する必要があるという政策提言を行った。

研究成果の概要(英文)：My research has focused on how the Korean cold war was developed according to the transformation of global cold war by making reference of much historical records of US, Japan, and ROK, and succeed in getting the knowledge that during the 1970s President Park Chung Hee had already adopted Nordpolitik (Northern Policy), which would be seriously advanced during the 1980s by the Chun and Roh administrations. Nordpolitik was ROK's foreign policy in order to take advantage of its political, economic, and diplomatic superiority over DPRK as the initiative policy selection among its fierce competition against DPRK.

Moreover, based on such knowledge, I make clear the fact that Japan has consecutively helped ROK achieve its diplomatic goals by all means available. Taking such historical facts into serious consideration, I insist that both ROK and Japan should construct our new productive relations even though our relations were full of frictions facing the 50th anniversary of normalization.

研究分野：国際政治学 朝鮮半島地域研究

キーワード：韓国 北朝鮮 朝鮮半島 冷戦 北方外交 日韓関係 米韓関係 デタント

1. 研究開始当初の背景

(1) 1970年代のデタント期に関する冷戦史研究、国際政治史研究は、各国の外交文書の公開なども相まって盛んに取り組まれるようになったが、その中でも冷戦の前哨として重要な位置を占める朝鮮半島冷戦史に関する研究は、本格的に取り組まれるようになってから日が浅い。したがって、国際的にインパクトを与えられるようなものはほとんどなかった。

(2) 韓国現代史研究においては、軍事クエータなどの政治変動に伴う政権交代があったために、朴正熙政権 18 年間の外交を一括したうえで、1980 年代以降の全斗煥、盧泰愚の両政権の外交との断絶を強調する傾向にあった。したがって、70 年代維新体制の外交に関しても、その反共一辺倒の外交が強調されてきた。

2. 研究の目的

(1) 国際冷戦構造における前哨として重要な地位を占めるにもかかわらず相対的に研究が不活発であったと考えられる朝鮮半島冷戦に関して、日米韓の 3 カ国の外交文書などの一次史料を活用することによって、米ソデタント、米中和解、日中国交正常化などの国際冷戦、地域冷戦の変容を南北朝鮮がどのように認識したのか、そして、それへの対応としてどのような政策を選択したのかを解明する。

(2) 朝鮮半島冷戦史に関する研究から得られる成果が、最新の 1970 年代冷戦史研究に対して、どのような意味で新たな知見を付け加えることができるのかを考察する。特に 1970 年代冷戦を、60 年代と 80 年代のそれと比較し、その連続と断絶という冷戦史における論争に対して、朝鮮半島冷戦の事例がどのような意味を持つのかを明らかにする。

(3) 以上の知見に基づいて、国交正常化 50 周年を迎える日韓関係について、日本外交や韓国外交の成果と限界を明らかにすることによって、日韓間の現在の摩擦をいかに克服して新たな関係を構築するのにかついて、政策的含意を持つメッセージを社会に発信する。

3. 研究の方法

(1) 日韓両国の外交史料館、米国の国立公文書館、および大統領図書館を訪問して、そこで、1970 年代から 80 年代にかけての朝鮮半島および東アジア国際関係に関する各国の外交文書を閲覧し、それを電子ファイルで収集しデータベースを構築することによって、歴

史研究の基本となる一次史料を利用する環境を整備する。

(2) 日米韓それぞれの外交文書を分析するだけでなく、同一事象をめぐって日米韓の政府、外交当局が、どのような異なる分析をしているのかを明らかにする。それによって、国家間の外交関係を解明するだけでなく、その背後にある、各国の外交観、国益観などにも分析の射程を広げることにより、マルチアーカイブ研究の利点を最大限に活かす。

(3) 歴史研究でありながらも、それが現在の問題を考察するうえで、どのような含意を持つのかを常に意識し、そうした問題を考察するために必要な情報や知見を獲得するために、国際会議などに積極的に参加し、そこで研究交流を深めたり、外交の実務を行っている人とのインタビューを行ったりすることで、現在の問題に関する政策的知見を獲得する。

4. 研究成果

(1) 韓国現代史の新たな時期区分

韓国現代史の分野においては、1961 年から 79 年まで朴正熙政権が続いていたために、その 18 年間は「朴正熙時代」として一括りに理解される傾向にあった。内政的には第 3 共和国、第 4 共和国（維新体制）という違いはあったものの、その 18 年間は権威主義体制下における反共独裁として位置づけられていた。

しかし、政治体制面においては、72 年を境界として、それ以前の第 3 共和国が準競争的権威主義体制であるのに比して、それ以後の維新体制は典型的な権威主義体制への変容したことが明らかになっている。そうした政治体制における変容とともに、外交面においては、60 年代における日韓国交正常化や韓国軍のベトナム派兵に見られるような冷戦に順応もしくは便乗した外交が、70 年代に入ると、グローバル冷戦や地域冷戦のデタント化への対応として、南北対話の開始や「6・23 宣言」などの「2つのコリア」政策を基本とする外交政策への転換が試みられるようになった。

本研究では、韓国現代史の研究において、従来 1960 年代の延長に位置づけられていた 70 年代の維新体制に関して、むしろ、60 年代の冷戦外交とは断絶している新たな解釈を提示することができた。

(2) 国際的な冷戦史研究へのインパクト

グローバルな冷戦史研究においては、米ソなどの大国間の 2 国間関係に関しては、60 年

代の対立から70年代には平和共存路線への転換が顕著であった。それに対して、第3世界をめぐっては、従来にも劣らず米ソの熾烈な外交競争、援助競争が行われたことが指摘されてきた。

朝鮮半島冷戦をめぐっても同様に、米中和解や日中国交正常化など大国間のデタントが、そこに埋め込まれた朝鮮半島に対してデタント化を促進するのではなく、むしろ、南北の競争をより一層激化する帰結をもたらしたという意味で、上記の70年代冷戦史の研究動向と合致すると受け止められていた。

しかし、本研究では、70年代の朝鮮半島冷戦は、一方で、上記のようなグローバルな冷戦のデタント化がもたらす影響を朝鮮半島の側で遮断するような動きが見られたが、他方で、南北朝鮮双方ともそれぞれの陣営内外交を越えて陣営を跨ぐ外交の可能性が切り開いたことを、韓国の対共産圏外交や対第3世界外交、北朝鮮の対日・対米外交に対する分析を通して明らかにした。その意味では、70年代の朝鮮半島冷戦史は、80年代の新たな展開を準備する時期であったと位置づけられるという、先行研究とは異なる結論を導出した。大国間のデタントは第3世界には受け入れられずに遮断されたのではなく、第3世界においても、後の時代の冷戦の終焉を第3世界という周辺部、前哨部から支える条件が生まれる種を蒔くことになったのである。

(3) 朴正熙研究の新地平

朴正熙研究は韓国現代史における最も重要な分野でありながら、韓国では依然として、その議論自体が政治的争点にならざるを得ない状況である。換言すれば、その時代を肯定的に評価するのか否定的に評価するのかという二者択一での議論が支配的な状況にある。

冷戦体制下、冷戦を利用した反共一辺倒外交という通俗的な評価しか下されることがなかった既存の朴正熙研究に対して、その外交政策、しかも硬直した外交ではなく柔軟でリアリスティックな外交を試み、相当程度実現したという新たな視点を導入した。そうすることによって、「政治化」され過ぎた朴正熙評価をめぐる議論の地平をより一層新たな次元に引き上げることを可能にした。

(4) 北方外交研究への含意

1980年代以降展開された韓国の北方外交は、中ソや東欧諸国との国交正常化や南北朝連同時加盟を達成するという成果を収めた反面、韓国の体制優位という有利な条件を対北朝鮮

政策に関して十分に活かすことができなかったという限界を抱えるというのが、一般的な評価である。

まず、こうした外交は何も韓国の力や体制優位が確実にあったことを前提として試みられたわけではなく、むしろ、南北の力や体制実績が拮抗していた時期に、既に朴正熙政権によって試みられたことを明らかにした。次に、中ソや東欧諸国を対象とした、所謂「陣営を跨ぐ外交」は既に1973年「6・23宣言」を前後する時期から行われていたことを韓国外交文書に対する分析を通して明らかにした。最後に、韓国の対共産圏外交が韓国の予想したほど順調に進まなかった背景には、韓国外交の力量の限界だけでなく、中ソ対立という韓国の力では統制不可能な要素が介在していたことを明らかにした。

(5) 韓国外交と東アジア国際政治史

1970年代以後の東アジア国際政治は中国の国際政治舞台の復帰と、その影響力増大によって大きなパワーシフトが開始された点に、その特徴がある。とすると、本来であれば、朝鮮半島においては中国と同盟関係を持つ北朝鮮の方に外交的には有利に働くことが予想された。にもかかわらず、70年代以降の南北朝鮮の体制競争、外交競争は劇的に韓国優位に展開することになった。なぜ、当初の予想とは異なる帰結をもたらしたのか。これは東アジア国際政治におけるパズルの1つである。

この問題に関して、韓国外交が、こうした北朝鮮有利に働く政治力学に抗して、積極的な「陣営を跨ぐ外交」を、対共産圏外交、及び対第3世界外交などで行うことによって、北朝鮮に対する体制競争や外交競争において韓国が優位を占めるようになったことを明らかにした。

(6) 日韓関係史の再解釈

1965年から2015年に至る国交正常化以後の日韓関係を、特に、70年代と80年代に焦点を当て分析することによって、現在の日韓関係を考察する場合にも有効である重要な知見を獲得することができた。従来の日韓関係史は、主として、日韓間の懸案に焦点を当て、それが未解決のまま残され、それによって対立が持続し増幅したことが強調される傾向にあった。

しかし、日本外交の中で日韓関係を位置づけると共に、韓国外交の中で韓日関係を位置づけるという歴史研究を行うことによって、日韓は、1965年の国交正常化以後、経済協力

によって相互の経済発展と政治的安定を確保したことはもちろんであるが、それだけではなく、外交協力、具体的には韓国の対米、対共産圏、対第3世界、対国連などの外交において、日本が積極的に協力することによって重要な成果を収めたこと、そして、そうすることが日本の外交上の利益にも貢献したことを実証的に明らかにした。換言すれば、共有する課題に関して日韓が知恵を出し合って協力することによって実に大きな成果を収め、今日の日韓関係がもたらされたことを明らかにした。

(7) 日韓関係の現状をどのように解くのか

現在、日韓関係は、歴史問題、安全保障問題、領土問題などに起因して摩擦が絶えない状況が続く。日韓関係それ自体が、従来のような垂直的、異質的、単層・単領域、単一方向的な関係から、水平的、同質的、多層・多領域、双方向的な関係に変容することで、「韓国が提起した要求に対して日本が妥協策を提示することによって日韓関係を管理する」という従来の方式はもはや通用しないと言われる。

しかし、この50年間、日韓が経済や外交などで蓄積してきた協力は、過去のエピソードではなく、今後の新たな日韓関係を構築する場合にも必ずや参考にしなければならない事例である。そのことを、日韓が共有する現在の諸問題、特に、外交における対米関係、対中関係、対北朝鮮関係などにおける日韓の協力の可能性と、それによって予想される利益などに注目することにより、明らかにした。

(8) 北朝鮮研究、日朝関係研究への含意

本研究は、主として韓国外交に焦点を当てたものであり、北朝鮮研究ではない。にもかかわらず、1970年代から80年代にかけての南北外交競争において、北朝鮮は中国の台頭という好条件にもかかわらず、それを活かすことができなかつたばかりか、体制競争、外交競争においても、明らかに韓国の後塵を拝することになった。なぜ、こうした南北の逆転現象が起こったのか。この点は、北朝鮮研究に課された重要な問題であるが、依然として満足のいく回答が得られたとは言い難い。

本研究の含意は、70年代において北朝鮮が固執した「1つのコリア」政策という選択に問題があったのではないかということである。北朝鮮がどのような情勢認識に基づき、なぜ、「1つのコリア」政策を選択し、それに固執したのか、この点は、北朝鮮の政治外交研究に

において取り組まなければならない問題である。確かに北朝鮮研究には資料の制約という重大な問題が横たわっているが、ぜひとも、今日の南北関係の現状を考える上でも、この問題は取り組むべき課題であると考えられる。

さらに、そうした北朝鮮と日本との間には未だに国交すらない状況である。70年代の日朝関係はある意味では最も関係改善の可能性が高まった時期でもあった。なぜ、日朝関係が改善されなかったのかも含め、停滞する日朝関係を、北朝鮮の核問題への対応を含めてどのように打開するのかを考察するうえでも、重要な示唆を与えるはずである。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計7件)

①木宮正史、一九七〇年代朝鮮半島冷戦に関する試論的考察：グローバル冷戦のデタント化と韓国外交、思想、査読無、1107号、2016年、pp.77-92。

②木宮正史、『慰安婦問題』から『戦時下の女性の人権』へ—韓国社会の変容と新たな歴史認識の模索、外交、査読無、32巻、2015年、pp.28-35。

③木宮正史、日本にとって朝鮮戦争とは一歴史の再解釈と、その現在的含意、アジア研究、査読無、61巻2号、2015年、pp.20-29、

https://www.jstage.jst.go.jp/article/asiastudies/61/2/61_20/_article/-char/ja/

④木宮正史、韓日外交協力の展開と50年の評価(韓国語)、韓国と国際政治、査読有、31巻1号、2015年、pp.1-26、

http://ifes.kyungnam.ac.kr/kor/PUB/PUB_0103V.aspx?code=PRI150331_0001

⑤木宮正史、安倍政権下の日韓(朝)関係と在日コリアン問題、日本学、査読有、38号、2014年、pp.1-22。

⑥木宮正史、「競争」し合う日韓のナショナリズム：ナショナリズムを「鍛え直す」ために、生活経済政策、査読無、211、2014年、pp.21-25、<http://www.seikatsuken.or.jp/database/files/n201408-211-005.pdf>

⑦木宮正史、米中関係と朝鮮半島、国際問題、査読無、628号、2014年、pp.15-23、

http://www2.jiia.or.jp/kokusaimondai_archive/2010/2014-01_003.pdf?noprint

[学会発表] (計28件)

①木宮正史、1970年代朝鮮半島冷戦史に関する試論的考察：グローバル冷戦のデタント化

と韓国外交(韓国語)、韓国国立外交院外交史研究センター第7回外交史ブラウンバッグセミナー、2016年2月24日、ソウル(韓国)。

②木宮正史、『韓日関係史 I 政治』を編集して(韓国語)、韓国東北アジア歴史財団主催「韓日国交正常化50周年を考える：韓日関係史50年シリーズ発刊記念」、2015年12月22日、ソウル(韓国)。

③木宮正史、日韓関係の検証と展望、日本記者クラブ主催研究会『日韓関係の検証と展望』、2015年12月4日、日本プレスセンター記者会見場(東京都千代田区)、<http://www.youtube.com/user/jnpc>。

④木宮正史、安全保障をめぐる日韓・日朝関係の対称性と非対称性、愛知学院大学国際研究センター主催講演会、2015年11月14日、愛知学院大学名城公園キャンパス(愛知県名古屋市)。

⑤木宮正史、日中韓首脳会談への提言：日本の韓国研究者の立場から(韓国語)、ソウル経済新聞社、世宗研究所主催『第1回 韓中日未来フォーラム 韓中日首脳会談と東北アジアの平和』、2015年10月21日、ソウル(韓国)。

⑥木宮正史、日韓バッファースystemとその動揺、日本政治学会2015年研究大会、2015年10月11日、千葉大学西千葉キャンパス(千葉県千葉市)。

⑦木宮正史、戦後70年、なぜ日韓は歴史問題に今直面するのか、構想日本・渥美国際財団主催第216回J.I.フォーラム、2015年9月28日、アルカディア市ヶ谷(東京都千代田区)。

⑧木宮正史、構造変容し漂流する日韓関係、朝鮮問題懇話会、2015年8月7日、国会記者会館(東京都千代田区)。

⑨木宮正史、日本の韓国研究の現住所：新たな可能性を模索して(韓国語)、韓国国際交流財団主催『KF Korean Studies Assembly 2015 Korea and Korean Studies in the World 70 Years After Independence』、2015年7月24日、ソウル(韓国)。

⑩木宮正史、日韓国交正常化50周年と日本の韓国研究、東京大学韓国学研究所部門開所記念シンポジウム、2015年7月12日、東京大学駒場Iキャンパス(東京都目黒区)。

⑪木宮正史、構造変容に直面、漂流する日韓関係、2015日韓国交正常化50周年記念国際学術大会 日韓関係：過去を越えて未来を切り開く、2015年6月17~19日、済州島西帰浦市(韓国)。

⑫木宮正史、構造変容に直面、漂流する日韓関係：何のために、いかに打開するか、日韓政治学会共催『日韓修交50周年記念国際シンポジウム 日韓協力の未来ビジョン なぜお互いが必要か』、2015年5月23日、北海道大学(北海道札幌市)。

⑬木宮正史、構造変容し漂流する日韓関係、21世紀ビジョンの会、2015年5月13日、アルカディア市ヶ谷(東京都千代田区)。

⑭木宮正史、日本の韓国研究と日韓国交正常化50周年：日韓「1965年体制」を「鍛え直す」ために、東京大学現代韓国研究センター『日本の韓国研究、韓国の日本研究 日韓国交正常化50周年：日韓1965年体制を鍛え直す』、2015年3月14日、東京大学福武ホール(東京都文京区)。

⑮木宮正史、日中韓関係の未来戦略の構築：どのような三角形なのか？、韓国ソウル特別市主催『日中韓知識人フォーラム：日中韓の未来志向的な同伴者関係の構築』、2014年12月22日、ソウル(韓国)。

⑯木宮正史、戦後日本の民主主義の展開：日韓関係からの逆照射、第7回日韓社会文化シンポジウム『日本社会の構造的変化と日韓関係』、2014年11月28日、韓国中央会館(東京都港区)。

⑰木宮正史、日韓外交の軌跡、日韓・韓日協力委員会主催シンポジウム『北東アジアの安全保障と経済協力：日本・韓国50年 回顧と展望』、2014年11月6日、ソウル(韓国)。

⑱木宮正史、歴史認識をめぐる日韓関係の展開とその現在の含意、韓国日語日文学会主催2014年秋季国際学術シンポジウム、2014年10月25日、ソウル(韓国)。

⑲木宮正史、韓国ナショナリズムの原型とその変容：反外勢・統一から歴史・領土まで、2014年度日本比較政治学会研究大会、2014年6月29日、東京大学本郷キャンパス(東京都文京区)。

⑳木宮正史、朝鮮半島統一への展望とそのための日韓協力の可能性、東京大学現代韓国研究センターなど主催『日韓協力と朝鮮半島の未来：朝鮮半島信頼プロセスの課題』、2014年6月23日、東京大学本郷キャンパス(東京都文京区)。

㉑木宮正史、東アジア学術共同体の発展と東京大学・ソウル大学の主導的役割、東京大学・ソウル大学オフィス相互設置開所記念シンポジウム、2014年4月14日、東京大学本郷キャンパス(東京都文京区)。

- ②木宮正史、金正恩体制と日朝関係、早稲田大学韓国学研究所主催朝鮮半島政策コロキウム北朝鮮専門家ワークショップ『金正恩体制2年の評価と展望』、2014年3月10日、早稲田大学西早稲田キャンパス（東京都新宿区）。
- ③木宮正史、岐路に立つ日韓関係の「診断」と「処方箋」、駐名古屋韓国総領事館主催『新しい100年のための日韓セミナー』、2013年12月16日、ウェスティン名古屋キャッスルホテル（愛知県名古屋市）。
- ④木宮正史、朝鮮半島の統一と日本の対朝鮮半島政策、韓国統一研究院など主催『第7回日韓政策フォーラム 北朝鮮・金正恩体制2年の評価と日韓政策協力』、2013年12月3日、早稲田大学西早稲田キャンパス（東京都新宿区）。
- ⑤木宮正史、安倍政権の対外政策基調と対北朝鮮政策（韓国語）、GK戦略研究院主催『東北アジア戦略環境と韓日戦略的協力』、2013年9月25日、ソウル（韓国）。
- ⑥木宮正史、日韓関係の構造とその変容—市民社会の変動の観点から、日本政治学会2013年度研究大会、2013年9月16日、北海学園大学（北海道札幌市）。
- ⑦木宮正史、東アジアの平和と大学の役割（韓国語）、Jeju Forum for Peace & Prosperity 2013 “New Waves in Asia”、2013年5月29日、済州島済州市（韓国）。
- ⑧木宮正史、日本の北朝鮮人権に対する認識と政策：批判的な視角から（韓国語）、韓国国家人権委員会・高麗大学校主催『Seoul International Symposium on North Korean Human Rights』、2013年4月30日、ソウル（韓国）。

[図書] (計8件)

- ①杉田敦、木宮正史 他、岩波講座現代4 グローバル化のなかの政治、岩波書店、2016、268 (191-213「パワーシフトに直面する東アジアと日本の位相」)。
- ②木宮正史 他、韓日関係史1965-2015 I 政治（韓国語）、歴史空間、2015、503 (57-86「韓日外交協力の軌跡とその現在の含意（韓国語）」)
- ③木宮正史 他、シリーズ 日本の安全保障第6巻 朝鮮半島と東アジア、岩波書店、2015、327 (1-11「アジアパラドックスと日本パラドックス」、75-98「日本の安全保障と朝鮮半島」)。

- ④木宮正史 他、日韓関係史 1965-2015 I 政治、東京大学出版会、2015、422 (1-11「構造変容し漂流する日韓関係」、39-63「日韓外交協力の軌跡とその現在の含意」)。
- ⑤木宮正史 他、韓日関係 このように解決せよ 国交正常化50年韓日知識人の勧告（韓国語）、キムヨン社、2015、476 (341-357「冷戦以後の韓日関係は歴史問題をどのように変えたのか（韓国語）」)。
- ⑥木宮正史、日本の韓半島外交：脱植民地化、冷戦体制、経済協力（韓国語）、J&C、2013、110。
- ⑦波多野澄雄、木宮正史 他、日本の外交第2巻 外交史戦後編、岩波書店、2013、302 (193-216「日本の対朝鮮半島外交の展開—地政学・脱植民地化・冷戦体制・経済協力」)。
- ⑧木宮正史、姜尚中 他、日韓関係の未来を構想する、新幹社、2013、289 (9-36「日本の韓国研究の展開と現状：新たな可能性の模索」)。

[その他]

報道関連情報

- ①木宮正史、識者評論 慰安婦問題に関する日韓合意、『共同通信』配信、『信濃毎日新聞』など、2015年12月30日。
- ②木宮正史、日本の専門家が見た安倍談話「批判されないように虹色模様」、『韓国日報』2015年8月15日。
- ③木宮正史、日韓国交正常化50周年リレーインタビュー『韓国日報』2015年6月24日。
- ④木宮正史、NHK総合 NEWS WEB23「どう読む日韓関係」のゲスト、2015年6月22日。
- ⑤木宮正史、BSフジ プライムニュース、日韓国交正常化50周年 慰安婦問題・70年談話関係改善策は？ パネリスト、2015年6月22日。
- ⑥木宮正史、「日韓国交正常化50年記念シンポジウム『日韓協力の未来ビジョン』」『朝日新聞』2015年6月9日。

6. 研究組織

(1)研究代表者

木宮正史 (KIMIYA, Tadashi)
 東京大学・大学院総合文化研究科・教授
 研究者番号：30221922